

有明月

たちまよふ雲のたえまにはのくとえらみて見ゆる有明の月

俳句

澄む月に投影法をまなびけり

朝日影松の枝こしに嶺の雪

滄海に春さめはれて嶋近し

さらくと時雨まぢりに落葉する

月の干瀉聲遠かりゆく群千鳥

冬枯や梢にかきの二つ三つ

月冴えて淋しき道や石地藏

正月や近縣旅行の文を讀む

歌馬の嘶もやんで元日羽子の音

垣越しの梅に酒酌む男かな

花の枝に鶯とまがふ雀かな

元日は皆新しきこゝろかな

若水にくみこむ星のひかりかな

初日さす松から雪のまづくろかな

寒月や氷打ちわる杓の音

是

梓

水

川空

松

露

枯

骨

錦

浦

戀

二

戀

花

秋 琴

武者一騎あがきはやめる雪の朝
櫓さえて影法師やゝ寒げなり
鐘樓にうちこむ暮の霞かな
ばんぼりの影朧なり梅の花

御題

蝶 二

蒼龍水底にあり岸の松
餅搗の隣はふみのさらひかな
橋の上に棄兒聲枯れて水凍る
氷る夜をさられてもとる女かな
下宿屋の破窓に霞さく夜哉

元旦

鶴は松龜は巖に初日の出

御題

松影を水に映して初日の出

批評

龍南會雜第五拾貳號を讀む

嶺上月下伐木樵夫
東壁窩主人

回顧すれば早や五星霜、明治辛卯の十一月、呱呱の聲を白濁にあげたる吾龍南會雜誌は早や五拾有二